

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
 【部門区分】第 3 部門第 4 区分
 【発行日】平成 29 年 3 月 30 日 (2017.3.30)

【公開番号】特開 2015-200003 (P2015-200003A)
 【公開日】平成 27 年 11 月 12 日 (2015.11.12)
 【年通号数】公開・登録公報 2015-070
 【出願番号】特願 2014-81018 (P2014-81018)
 【国際特許分類】

C 2 3 F 13/00 (2006.01)

【F I】

C 2 3 F 13/00 P
 C 2 3 F 13/00 C

【手続補正書】
 【提出日】平成 29 年 2 月 20 日 (2017.2.20)
 【手続補正 1】
 【補正対象書類名】明細書
 【補正対象項目名】0048
 【補正方法】変更
 【補正の内容】
 【0048】

本実施形態の通電端子の材質は、通電端子として機能する材質であれば特に限定されるものではないが、例えば、チタン等が挙げられる。

通電端子の形状は、特に限定されるものではないが、例えば、矩形状の板体を一方向に沿って約 90° の角度をつけて折り曲げられた側面視 L 字形状のもの等が挙げられる。

【手続補正 2】
 【補正対象書類名】明細書
 【補正対象項目名】0062
 【補正方法】変更
 【補正の内容】
 【0062】

表 2 に示すように、モルタルの厚みが厚くなるにつれて防食電流密度が小さく、すなわち電流量が少なくなることがわかる。厚みが 1.0 mm ~ 10.0 mm である陽極構成体 B2、C2 及び D2 では防食電流として 好ましい 範囲の電流密度であった。

【手続補正 3】
 【補正対象書類名】明細書
 【補正対象項目名】0073
 【補正方法】変更
 【補正の内容】
 【0073】

モルタルを形成する領域は上面視矩形状の領域であり、以下のようなサイズに設定した。すなわち、図 3 に示すように、通電端子の周端縁からモルタルの層の周端縁までの距離 A (モルタルの領域の矩形状の一辺との最短距離) が 0.1 m、0.2 m、0.5 m、1 m、2 m、2.5 m になるように、モルタルの層を形成した。

比較として、モルタルの層を形成しなかった以外は、同様の構造体を作成した。防食電流に加え、外部電源装置 (装置名 HA-151B、北斗電工社製) を用いて金属層の面積あたり 50 mA/m² の電流を供給し、3 ヶ月間通電した。その後、目視にて金属層の劣

化状況を観察した。劣化状況の判断は、金属層がコンクリートから浮いている箇所、はがれている箇所が生じている場合には劣化していると判断した。

結果は、距離 A が 0 . 1 m の構造体は、モルタルの層を形成しなかったものと同等程度に劣化していた。一方、距離 A が 0 . 2 m ~ 2 . 5 m の構造体は、モルタルの層を形成しなかったものと比較して、浮きやはがれが少なく、すなわち劣化が抑制されていた。